

# スロレタリア通信

NO.12  
1968  
7.6

共産主義者同盟政治部

一 共産主義者同盟 - 社会主義青年同盟 同盟財政委員会が発行する『基本問題』について

全国を語る 首都の枝肉責任者語る。

どのように語る。

同盟政治部は、この同盟ならびに社会主義青年同盟、都々との合同財政委員会を発足させ、当面の諸活動にたりする財政政策の一元化をはかり、臨時組織の有形的結合をより強固にするべきことである。また同盟政治部は、全国を語るに際し、各級各級幹部責任者語る及びこの委員会の手導のもとに、この基本的財政活動を推進し、かつ、展開す

同盟中央財政は、当初の予定を大きく上まらつて膨脹している。これは主として中央幹部体制の維持・拡大と枝肉誌紙発行、およびこの間々の同盟幹部競争による印章費の増大によるものである。この

支出増加率に比べて収入はむしろ一定であった。このため、同盟財政は有形的な局面を

むなしくするべきことを確認しなければならぬ。

われわれはまづオ一に、同盟  
費の原則的・中期的収約をま  
ずする完全に全細胞を通じて  
實現しなければならぬ。財  
政的にも同盟活動を支えるこ  
とは同盟費の初歩的基礎であ  
り、これをめぐって同盟費  
とこの一切の政治的発言  
活動はなりこと、これを徹  
的に確認しなければならぬこ  
である。

尙租税があるすぐれた「理論  
」主張」に勝つようにはい  
ふことである。自由主義  
的に形成されることを「政

となおかつ、その十倍の強  
さ及び強さである。この同盟を  
確認する必要がある。当面の  
われわれの党建設とは、  
いわゆる上からの党とはい  
々々々上からの活動、財政を積  
蓄的に保障し、全同盟あげ  
てこれに力づく任務を不可避  
のものとしてくる。この任務  
の結果からのみれば、なな  
な体制を保障するなな々々、そ  
れが全同盟の発展的動として  
ついでにこれに全同盟  
及び建設に力づく革命的能  
力をもつてのぞむのみ、日和

主義」上からの強敵はなほ爾奥  
を打ちつつ新左翼の戦線のな  
れとみられる。インテリ諸君  
が彼らの自己主張（路線と称  
する）の恣意的寡黙によつて

ある（この恣意的寡黙によつて  
）と租税自体を考へることだ  
とすべきのに対して、る。口こ  
タリマ一トは租税自体の諸君  
展、その性格の形成のなかに  
自己主張を展用する。この及  
びに力づくわれわれはる口  
しタリマ一トへの論議的段階を  
歩みはじめたのみである、こ  
のままにこの段階を及々々々  
格的性格の方向のみを論議し

合理的なべきは明白な現象と  
して向う来る、とこのこと  
である。

民主主義的態度をもつて対応す  
るが、百の議論によつても  
合理的なべきは明白な現象と  
して向う来る、とこのこと  
である。  
だがオ一にわれわれは財政向  
題が同盟の組織的政治的問題  
の主要な一環としてあるが、  
これに力づく任務を不可避  
のものとしてくる。この任務  
の結果からのみれば、なな  
な体制を保障するなな々々、そ  
れが全同盟の発展的動として  
ついでにこれに全同盟  
及び建設に力づく革命的能  
力をもつてのぞむのみ、日和

ちなためてゆくことが絶対に  
必要なのである。

オ一に当面する同盟の体制が  
らば、現在の中央財政の規  
模はきりぬぐって過重なもの  
で、この過重なものをなくし  
こめなければならぬ、と  
いうことである。

現状、我々は同盟費（その自  
体及び過重な）収入の額の  
十倍に近（額）の支出を毎月、  
保障しようれば、この体制を租  
税を（この）にキレ、こ  
われわれは、全同盟費の拠  
する同盟費に全面的に依るこ

以上、この観点から、同盟一  
社各向の合同財政委員会はな  
なる諸君、とくに民主主義  
と関与した諸活動の財政的保  
障を設け、決定した資金制  
出稼金を総合的に集積集約集  
中することとめぐって活動を  
展開しなければならぬ。

- ※ 全同盟費は指定の同盟費  
を（この）に納めよ、
- ※ 6ノに集金入場券の回収  
一資金を（この）に納めよ、

(又上)

二 対華に來りしもの「面」批判「面」としりかゝの態度について。

去る七月五日、中大はじめ都内大学において  
 さら同盟学生組織をめぐり同盟三組織署名の  
 書に來りしもの「面」批判「書」は、  
 手紙に來りしもの「面」批判「書」は、  
 「面」批判「書」は、

同日、大同の時々に、  
 ニ、この書は、  
 大同の時々に、  
 ニ、この書は、

待望するものは、

われの政治組織的指導の次第に基くところな  
 大きい。我々は、この書の徹底的自己批判と卓  
 著に、この書は、  
 に対して、この書の徹底的  
 「面」批判「書」は、

「面」批判「書」は、  
 「面」批判「書」は、  
 「面」批判「書」は、

「面」批判「書」は、

この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、

この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、

一 書の内容

この書は、  
 この書は、  
 この書は、

位置と目的

この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、

位置と目的

この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、  
 この書は、



「軍艦の意味と力」の態度。 したがって「相松論」を把握しえぬ構

本質的提法は現代革命と前代受継

の史的向野にあり、この本質的

向野への相松批判の中心に

あり、この相松論は、その

論の中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

論、特殊主義論、内別現象論と

もつて、この相松論は、

その中心に、軍艦論、

論、向野論、特殊主義論、

(上) (下)